

佐土原キリスト教会 2023年9月17日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章13～16節

説教題：あなた方は、地の塩、世の光

「宝島」や「ジキル博士とハイド氏」を書いたイギリスの小説家ロバート・ルイス・スティーブソンが、ある日、言いました。「今日は、教会に行ったが、気が滅入らなかった」。教会もこうなると悲劇です。教会は、気が滅入る場所ではなく、滅入った心に癒しを、希望をもらう場所でなければならないと思います。

「山上の説教」の学びを続けます。今日の箇所でイエス様は「あなたがたは地の塩です。世の光です」と語られます。なぜ「塩」と「光」を用いられたかという、どんなに貧しい家庭でも「塩」と「光」は使ったからです。だから、この譬えを聞いた人々は、イエスの言われることを自分の経験に当てはめることが出来たのです。2つに分けてお話し致します。

1: 「地の塩」とはどういうことか、どのようにして「地の塩」であれるのか？

まず「あなたがたは、地の塩です」(13)とはどういうことでしょうか。塩の役割は大きく2つ。「調味料としての役割」と「物が腐るのを防ぐ保存の役割」です。今は、保存の役割はもっぱら冷蔵庫がしますが、冷蔵庫がない時代は、塩がその役割をしました。塩を使うと腐るのを防ぐことが出来ます。イエスが「あなたがたは、地の塩です」(13)と言われる時、「キリスト者は、あなたは、世の中にあって、世の腐敗を防ぎ、社会に良い味をつけて行く、そのような存在である」と言われたのです。「あなたがいるからこの世は腐らないですむ」、そう言われたのです。

しかしそう言われると、私達はどうかでしょうか。「いくら何でも自分の現実からかけ離れている、とても自分はそのように言ってもらえる者ではない」、そう思うのではないのでしょうか。また世の中には、クリスチャンでない立派な方が沢山おられます。信仰者である私達が恥ずかしい思いをすることが良くあります。しかしイエス様は、こんなに大きなことを誰に言っておられるのか。イエス様の目の前に座っている、当時の社会において取るに足りないような人々、何も分かっていない12弟子、そういう人々に語っておられるのです。言うなれば、私達に語っておられるのです。イエス様が私達に「あなたがたは地の塩である」と言われるのです。だからこの言葉を聞く時に大切なことは「私達が自分のことをどう思おうが、イエス様の方は私達をそう見て下さっている」ということです。私達は、自分に対する自信の無さもあって、「信仰者と言っても、他の人と何も変わらないのですよ」と言ってしまうことがあると思います。あるいは、それで自分を納得させたり、自分を赦したり、そうしている面があるのではないのでしょうか。しかしイエス様は、決してそうは見えておられません。イエス様は、私達の中に「信者の理想—『地の塩、世の光』としての姿」を見ておられるのです。だから大切なことは「私はとてもそんな者ではありません」と「遜り傲慢」になることではなく、イエス様が私達の中に見えて下さる理想に、私達も生きようとして見ることはないかと思えます。

そして、ここで大切なことは、イエス様は「もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられ、人々に踏みつけられるだけです」(13)と言っておられることです。つまり「地の塩」として生きるのか、「何の役にも立たず、捨てられる」か、どちらかしかないのです。私達は、理想に生きよう等とは思わない、平凡な信仰生活を生きたいと思っている面があると思います。しかしイエス様によれば、「キリスト者として世に在って全く平凡に生きる」という生き方はないのだと思います。私達は、皆が「地の塩」として生きる、「キリスト者の理想に生きる」、そのように招かれているのです。そうでなければ「何の役にも立たずに捨てられる」と言われるのです。

では、どうやってそのような生き方が出来るのでしょうか。それは何よりも、イエスの教えを信仰と生活の土台として一途に生きるということだと思います。水野源三さんのことを以前も御紹介しました。水野さんは、小学4年の時に脳性麻痺のために身体の自由を奪われ、動くこともしゃべることも出来なくなりました。テーブルの上に首を載せてじっとしていることしか出来なくなりました。しかし、やがてお母さんが指し示す「あいうえお五十音表」の文字に瞬きで合図して、一文字ずつ拾ってもらい、そ

れをつづり合わせてもらい、詩を書くようになりました。水野さんの詩は、やがて榎本保郎という牧師の手で詩集として出版されることとなりますが、榎本先生が出版依頼のために水野さんの家を訪ねた時のことです。途中で出会った人に水野さんの家を尋ねたら、その人が別れ際に「水野さんはこの町の宝です」と言ったそうです。まだ詩集を通して世に知られるようになる前のことです。水野さんは、世的に言えば—(失礼ですが)—最も弱い人だったと申し上げても良いかも知れません。水野さんが、何か町の役に立ったとか、町の人に何かをしてあげたとか、そういうことではありません。日本のどこの町もそうであるように、恐らく人口の99…%がキリスト教を受け入れていない、そういう町の中で、彼はただ神を信じ、神を信頼し、神に感謝し、神を讃美し、そして精一杯、神に従おうとした、ひたすらキリスト教信仰を求めただけなのです。水野さんのこんな詩があります。「物が言えない私は、有難うの代わりにほほえむ、朝から何回もほほえむ、苦しい時でも悲しい時でも、心からほほえむ」(水野源三)。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」(1 テサロニケ 5:16~18)。この言葉に水野さんなりに精一杯生きたのです。その姿を、立場を異にする町の人々が受け入れ、彼を「町の宝—(地の塩)」と呼んだのです。特別な話かも知れませんが、それでもイエス様を真摯に求める時、「地の塩」というか「世に在って何者かとして」生きて行けるのではないかということを見せてくれる話です。

話が逸れるかも知れませんが、「旧約聖書」に、ソドムの町の罪があまりにも酷いので、神がこれを滅ぼそうとなさった時、アブラハムが必死になって執り成す記事があります。「町の中に50人の正しい人がいても、町を滅ぼされるのですか。50人のために町をお赦しにならないのですか。45人ではどうですか。40人ではどうですか。30人ではどうですか。20人ではどうですか。10人ではどうですか。神は「滅ぼすまい。その10人のために」(創世記18:32)と言われるのです。私達は、数も少ない、世的には、取るに足りない存在です。力もない、何もない。でも神の視点から見ると、また違うのではないのでしょうか。私達が本当に誠実に遜って神を畏れ、神の目に喜ばれるように歩いて行く時、神の視点では、私達の家族や、職場や、地域や、町が、そのために祝福されているということがあるのではないのでしょうか。少し大きな話になりましたが、しかし、私達の信仰の姿勢は、神様の視点に決して小さくはないのだと思うのです。

話を戻しますが、「地の塩」という言葉に関係する次の御言葉があります。「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります」(コロサイ4:6)。あるいはこの「塩味」というのは「神の恵みが宿っているような言葉」という意味だそうです。53歳でガンのために召された先生は、最後の日々、このように日記に書いています。「『今日…私はだれかにほほえみをもたらしたか』、『いやなことばを語ったか』、『怒りをやり過ぎたか』、『人を赦したか』、『人を愛したか』…主が平安—(平和)—を下さったことの実は、だれかに平安—(平和)—を少しでも与えることである。私の残された日々も、そういう1日1日でありたい」(片岡伸光)。「私の言葉には神の恵みが宿っているだろうか、良い塩味がついているだろうか」と、そう問うことも「地の塩」としての生き方に大切なことではないのでしょうか。いずれにしても私達が一途に神を見上げて生きる時、御言葉に従って、神に喜ばれるように生きようとする時、私達もそれぞれの置かれた場で「地の塩」として生かされることが出来るのではないのでしょうか。

2:「世の光」とはどういうことか、どのようにして「世の光」であれるのか?

イエス様は次に「あなたがたは、世界の光です(世の光です、世の光として生きなさい)」(14)とされました。「世の光」とはどういうことでしょうか。「地の塩」より、さらに話が大きくなるような感じがするのですが、「塩」が「腐るのを防ぐ、妨げる」という、どちらかという消極的な働きをするのに対して、「世の光」とは「世を照らす」、「暗やみを照らす」という積極的な働きをするように勧められるように思います。しかしこちらについては、「どのようにして」ということについてまで言及されています。16節「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(16)。イエス様は「『キリスト者の光』は『良い行い—(良い

業』である」と言っておられることになります。

では「良い行い」とは何でしょうか。日之影教会の献堂式の時、ゲストスピーカーは「教会が日之影町の光となるように…」と語られました。「教会が町の光となる」とは、「教会が、この暗い世にも希望があることを表現する」ということでもあるでしょうし、同時に「教会が町の人々の執り成しを祈る」ということではないかと思えます。その意味で私達は、自分の隣人のために、地域のため、町のために、神の恵みを祈るべきだと思います。それも「世の光」としての働きではないでしょうか。

しかし私達は、世の中が暗い、その暗闇の一番の理由はどこにあると考えます。その時、「聖書」は言います。「神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました」(ローマ 1:21)。「聖書」が語るのは、「例えば国が暗くなる、行く道を誤る、人々の心が荒廃する、その一番の原因は、人々が本当の神から離れているところにある」ということです。カナダで出会った神学校の先生は、日本人の救霊に重荷を持っておられる方でしたが、「日本の色々な問題は、その根っ子は霊的な問題だと思う…神に頼ることも、神を畏れることも知らない、そのことが色々なところに問題となって出ているのではないか、そこに闇があるのではないか」と言われました。そして実際、私達は、生きて行く光を神の中に見ているのです。世の中の人々も、その光を必要としていると、私達は信じます。この社会全体が、その背骨のところに、神を必要としているのではないのでしょうか。{アメリカが、あれほど色々な問題があつてグラグラゆれながらも、それでも世界のリーダーとして国が立って行く、そこにキリスト教があるからではないのでしょうか。アメリカで南北戦争が終わり、北軍が勝った時、ある人が北軍の指導者リンカーン大統領に聞いたそうです。南軍(南部)の人々をどうしますか。リンカーンは答えました。「私は、離反など全くなかったかのように彼らを扱うつもりです。なぜなら神ご自身が私達をそのように扱われたのですから」。そうやって戦争で傷ついた南北両軍(両地域)の溝が埋められて行った。神を知る指導者を持つ国は幸いです。いずれにしても私達が「世の光」としてまず為すべき「良い行い」とは、キリストを「世の闇、人の闇を照らすことの出来る真の光」として人々に証しして行くことではないのでしょうか。そして、証しをして行くために、私達は「良い行い」に生きるように奨められているのだと思います。

どうしたら「世の光」と言われるような「良い行い」をして行く者になれるのか。イエス様は、「塩」については「塩気を無くすな」と言われましたが、光に関しては「あなたがたの光を人々の前で輝かせ…」(16)、つまり「隠すな、人に見えるようにしなさい」と言われました。それは「わざと人の目につくように善行をしなさい」ということではありません。置かれた場で、精一杯、信仰に生き、主の業に励むことだと思います。すると、私達の背後に神がおられることを、人々が気づくと言われるのです。

水野源三さんについて次の文章があります。「大人も子供も、源三を支えているのは、神以外の何ものでもないことを知っていた。それは何か大きな出来事を通してというのではなく、日常の落ち着いた、迷いのない彼の生き方を見て、そう思わずにはいられないようにされていたのだ。源三は直接的な伝道をしたわけではなかった。しかし、信仰によって人は変えられ、神によって豊かにされることを、まのあたりに実証して見せた。それは源三の力ではない。神の力であることを、人々は信じた」。私達が神様に頼り切り、神様の中に光を—(希望を)—見て生きる時、その生き方がそのまま、神様を証する「良い行い」だと思わされるのです。

さらに言えば…。先日も紹介しましたが、「敵をもてなす」という証しでは、南米のある村を襲撃した軍隊の隊長が、1人クリスチャンを通してキリスト教に興味を持ち、村の礼拝に出て来ます。村の礼拝では、新しい人が来ると全員がその人を抱擁して歓迎することになっていました。司式者が「この隊長達は村の人々にとって、自分の夫や息子、兄弟を捕らえて連れて行った張本人だ。彼らを歓迎することはとても出来ないだろう」、そう思って歓迎のプログラムをとばそうとした時、村人の方からそれを始めたのです。最初に近づいた人が言いました。「兄弟、あなたが私達の村にしたことは間違っていると思います。けれどもここは神の家です。神はあなたを愛しています。だからあなたを歓迎します。良くいらっしやいました」。村の人々は、夫を連れ去られた人も、兄弟を連れ去られた人も、皆が次々と歓迎の言葉を述べました。最後の人が歓迎の挨拶を終えた時、隊長が話をさせて欲しいと言いました。「村を襲撃

してその村にやって来たのに、兄弟として歓迎されるとは考えもしなかった。今朝、この目で見たことはほとんど信じられないくらいです…教会の礼拝に来たのはこれが初めてです。今まで神がいる等と思ったことは一度もなかったけれど、私は今、不思議な感動を味わっています。生きている限り、神の存在を疑うことはもう決してないと思う…ここにいる人達は、皆、神を知っているのですか。もしそうなら、どんな時でも神にすがりついて下さい。神を知るということは、この世で一番素晴らしいことに違いないと思う…私もいつかは『神を知っている』と言えるようになりたい。神を信じる中に解決があることを、神は人を素晴らしく生かして下さることを、この無名のクリスチャン達は、信仰の行いを通して見事に表したのです。「世の光」として生きたのではないのでしょうか。

この話は、私達の日常生活からはかけ離れた話ですが、しかし、私達にも語りかけます。私達が、神を信頼し、誠実に信仰に生き、神に愛された愛で隣人を愛して行く、そのような信仰を生きる時、自分の力ではない、神の力で、置かれている場で、家族の中で、職場で、コミュニティーの中で、神の素晴らしさを証しするような「良い行い」をして行けるのではないのでしょうか。「世の光」として存在出来るのではないのでしょうか。いや神がそのように用いて下さるのではないのでしょうか。そう信じます。

3:まとめ

イエス様が「あなたがたは、地の塩です。世の光です」と言われる時、イエス様が私達の中に理想を見て、聖霊の力によって私達を変えようとしていて下さる、ということとセットだと思います。イエス様は、私達を諦められない。私達の中に「作り変えられた姿」を見て、取り扱い続けて下さるのです。その意味で、神が私達を「地の塩、世の光」として生かそうとしておられる、その神の働きこそが「地の塩、世の光」の主人公であると言っても良いかも知れません。その神の働きに信頼して、「神様、私のような者でも良かったら用いて下さい。信仰に打ち込みます、力を与えて、『地の塩』、『世の光』として生かして下さい」と委ね、祈って行くことが大切ではないのでしょうか。やがて天国でイエス様にお会いする時が来ます。その時「よくやった。良い忠実なしもべだ」(マタイ 25:23)と言って頂けるように、精一杯、信仰に生き、主の業に励みましょう。